本のひろば

［月刊］キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター
1957年7月17日第三種郵便物認可
2016年8月1日発行（毎月一回発行）第703号
ISSN 0286-7001

出会い・本・人
後から気が付かされること　大宮　謙

本・批評と紹介
G.M.バーグ、D.ラウバー　編／本多峰子　訳
だれもが知りたい キリスト教神学Q&A　大坂太郎

本井康博　著
新島襄と明治のキリスト者たち　太田愛人

荒井　献　著
使徒行伝 下巻　今井誠二

土岐健治、村岡崇光　著
イエスは何語を話したか？　原口尚彰

金子晴勇　著
キリスト教人間学入門　芦名定道

津曲裕次　著
鳩が飛び立つ日「石井筆子」読本　杉山博昭

上林順一郎　監修／みふみ　マンガ
教会では聞けない「21世紀」信仰問答Ⅲ　古賀　博

賀来周一　著
キリスト教カウンセリング講座ブックレット7
自分を知る・他人を知る　関谷直人

平野克己　監修／加藤常昭、深田未来生ほか　著
聖書を伝える極意　森下　滋

内坂　晃　著
闇の勢力に抗して　関田寛雄

聖和史刊行委員会　編
Thy Will Be Done　戒能信生

本屋さんが選んだお勧めの本

既刊案内

書店情報

8 AUGUST 2016

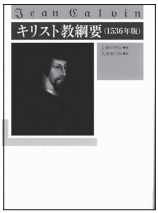
7月の新刊（価格表示は税抜）

既刊のご案内

カルヴァン関連書籍

キリスト教綱要（1536年版）

J・カルヴァン　久米あつみ訳



刊行後、たちまちプロテスタント最初の体系的教理書・生活綱領として広まった、宗教改革者カルヴァンの処女作。すでにカルヴァン神学の全貌を予告する本書は、若き改革者の信仰の清冽な息吹を伝える。

●A5判・416頁・本体4,500円

ジャン・カルヴァン ある運命

森井　眞

●四六判・400頁・本体3,300円

カルヴァンの全書簡を読破し、肉声に触れた出色の評伝。《神の栄光のために》友情・信仰・使命・闘争を生き抜く人間カルヴァンの実像に迫る。

歴史の中のカルヴァン像

カルヴァン 亡命者と生きた宗教者

C・シャトローム　菊地純子訳

宗教亡命者としてジュネーヴに渡り、教会改革者となったカルヴァンの生涯と思想をコンパクトに解説。最新の歴史学的研究の成果を反映させた新しいカルヴァン像を描く。

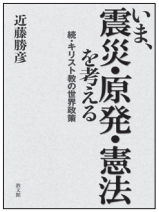
●四六判・176頁・本体2,200円

日本のこれからを考えるために

いま、震災・原発・憲法を考える

続・キリスト教の世界政策

近藤勝彦



東日本大震災、終戦70年を経て、日本の教会とキリスト者は現代の難問と苦難をどのように考えていけばよいのか？山積する社会問題を見つめ直し、神学者の立場から希望をもって語りかける。

●四六判・204頁・本体2,000円

改憲問題とキリスト教

稲垣久和

日本国憲法に具現している「人類普遍の原理」を、公共哲学とキリスト教精神から積極的に活かす「活憲」を提案。戦後の民主主義を捉え直し、憲法の本来の役割を説く。

●四六判・202頁・本体1,300円

教文館　〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549（出版部）
本のご注文は〈e-shop 教文館〉へ！　http://shop-kyobunkwan.com/
e-shop 教文館

出会い・本・人

後から気が付かされること――大宮　謙

ジョン・ガルブレイスの『不確実性の時代』についてテレビの特集番組を見て経済学に興味を持ち、自宅浪人生活を経て、慶應義塾大学に入りました。学業成績は振るわなかったものの、国際経済のゼミで学びたいと願い、選考テストの成績のみで合否が決まる唯一のゼミを受けました。こうして、アフリカ経済が専門の矢内原勝教授の指導を受けることになりました。入ってから気が付いたのですが、先生は矢内原忠雄氏の三男でした。かつて忠雄氏も住まわれた自由が丘のご自宅に伺わせていただいたのも懐かしい思い出です。

卒業後、バブル絶頂期に日興證券に入社しました。これまた入ってから気が付いたのですが、会社の創業者、遠山元一氏は銀座教会の会員だった方でした。入社後間もなくバブルが弾ける中、教会関係の同年代の友人が相次いで自死したこともあり、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」働きをしたいと願い、ＮＰＯ団体などに顔を出し、将来の道を模索しました。会社の夏休みに訪れたネパールの首都カトマンズではＵＭＮという団体で長年働いておられた高津良平氏に出会いました。早逝した高津氏の「いつか一緒に仕事をしよう」と言ってくださった言葉が今も記憶に残っています。そんな中で、突然、身辺に思いがけない変化が起こったことをきっかけに、生まれて初めて聖書を通読しました。この時、両親が牧師という環境で分かった風に思い込んでいた聖書の示すところを初めて真剣に受け止めました。すなわち、自らの罪を突き付けられ、この罪を赦すために十字架で死んでくださり、復活したキリストご自身と出会ったのです。すべてを奪われたように思う時にも、なお共におられるキリストを宣べ伝える伝道者となることを決意し、神学的素養もないまま、東京神学大学に入学しました。

在学中、阿佐ヶ谷教会のイースター礼拝に当時の東京神学大学の松永希久夫学長が説教者として来られたことがありました。極めて聖書に忠実な説教で、聖書の言葉が不思議なほど鮮やかに後々まで心に残りました。大いに感銘を受け、思いがけず新約聖書神学を志すこととなりました。十一年の教会での牧師としての働きを経て、今度は思いがけず大学に働きの場を得ました。自らの研究領域を模索する中で、たまたま大学近くの書店で目に留まったのが、リチャード・ボウカムの『イエスとその目撃者たち』（新教出版社）でした。学問的刺激を大いに与えられ、その後の研究の方向性を示された貴重な出会いでした。実に計画性のない自分の人生に、思いがけず、これでもかと与えられてきた出会いに感謝の日々です。

（おおみや・けん＝青山学院大学宗教主任、社会情報学部准教授）

だれもが知りたい キリスト教神学Q&A

キリスト教の「基本」をおさえる
G・M・バーグ、D・ラウバー編
本多峰子訳

大坂太郎

読み終わった瞬間、四半世紀前に引き戻されたような錯覚を覚えた。常夏の島での神学校最初の授業、うなりを上げるエアコンの下、神学概論を講じた恩師はこう言った。「質問を歓迎します。なんでも聞いてください」。詰め込み教育を是としてきた日本に生まれ、かつ多くの人から「原理主義」と目される教派に育ったがゆえに、敬虔の美名のもと「疑問を持つこと」自体を制限されてきた私にとってそれは驚きの発言だった。

「キリスト教って何?」「聖書は誤りなき神のことばというけど、それは何を意味しているの?」「悪や苦難はすべて罪の結果なの?」「イエス様は神様だから性の誘惑を受けることなんかなかったんでしょ?」「聖霊って何（誰）?」「うちの教会は問題だらけ。偽善者の集まりですよ。そんな教会がどうしてイエスの愛を指し示せるの?」「はっきり教えてください。死んだらどうなるのでしょう?」本書に収録されているほとんどの問いは、かの日我がクラスメイトたちが、そしてシャイだった若き日の自分がどきどきしながら拙い外国語をやりくりしながらしたものと同じだった。これらの問いはキリスト教に興味を持つ者たちの誰もが問う質問なのだ。

本書は上記のような質問にアメリカを代表する福音主義キリスト教主義大学、ホイートン大学の教授たちが解説と回答を与えるものである。どの答えも誠実かつ的確である。

例えば畢竟キリスト教とは何かという問いには「キリストを信じ、イエス・キリストに従う生き方である」（一三頁）という単純かつ明快な回答が即座に供えられる。また聖書の「誤りのない」性質については、現在福音派教会の中にある二つの立場、すなわち無誤性と無謬性の立場を紹介した上で、両者が合意している信頼性についての弁証を行い、同時に聖書解釈者が聖書に対して持つべき謙虚さ（無知を承認すること）を教えるといった具合に包括的な解説と回答を示している。

またイエスが性的誘惑を受けていたかという、いかにも大学生にとって気になる質問に対しては、一方ではイエスの人性の中に健全な性的能力と関心があったことを認め、ナイーブな潔癖主義を戒めつつも、イエスはアダムの末裔であり罪を犯すことが不可避である我々堕罪後の人間とは異なり、罪を犯す不可避性には縛られておらず、実際に罪を犯さなかったと主張している。

更に巷間よく聞く教会の中にある罪と偽善の問題に関しては性急な非難と分離主義を戒めるとともに、信徒個々人、そしてその集合である教会が自らを正しく見つめ、「義とされながらも同時に罪びとである」という状況を真実に受け止め、告白することを要求するとともに、それを認めなければそこには「誰も存在しえない教会」が出現するといったウィットに富んだ回答を提供している。

本書の回答は訳者がそのあとがきに明記しているように、特に主流派に属する読者諸氏にとっては非常に保守的な見解であることは言を俟たない。

だが評者は、日本のキリスト者たちが本書を通じ世界中で広汎に受け入れられている「保守的」な見解を知ることは非常に有益であると考える。本書で提供される答えは書道でいえば「楷書」、いわば基本である。流動的字形で書かれる草書、行書に対し、楷書は線の一つ一つが独立しているのでわかりやすく、字形は構築性に富んでいる。また一点一画ずつ、決められた画数を筆順に従って書いていく厳格さがもたらす画一性は、広汎に読まれる印刷にも適する。そうした理由で楷書は正書とも呼ばれ、書道は「まずは楷書から」となるのだ。

教理も同じ。新しい時代、あるいは異なる状況と文化脈を意識しつつも、広く伝えられた「基本」を押さえておかなければ発展は覚束ない。そう考えるとき、個人で、また教会教育として本書を用いてキリスト教教理の「臨書」を今一度行うことには十二分の意味がある。良書である。一読をお勧めしたい。

（おおさか・たろう＝日本福音主義神学会東部部会理事長）

（A5判・二三八頁・本体二八〇〇円＋税・教文館）

新刊

聖書学論集47

日本聖書学研究所編
●A5判並製　定価3000円＋税

ヨブ記42章6節をどう解すか
――ヨブ記におけるヘブライ語語彙根מאס をめぐって
山吉智久

●

使徒行伝6章の「ヘレニスタイ」はだれか
――その歴史的実体と地理的拡大
橘　耕太

●

マルコ福音書の文脈におけるイエスの最期の叫び
――「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」の意味
本多峰子

●

「キリストの死」と「神の愛」の関係（ロマ5:5-6.8）
吉田　忍

やさしいキリスト教入門書

末岡成夫/高力義博/藤江 健 著
●小B6判並製　定価800円＋税

キリスト教信仰の基本的な学びのために、聖書のみ言葉を土台としてキリスト教をやさしく解説していく入門書。

LITHON［リトン］
〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

教派を超えた明治キリスト教友情史
本井康博著

新島襄と明治のキリスト者たち

横浜・築地・熊本・札幌バンドとの交流

太田愛人

明治時代から遠ざかる今日、明治人への回顧、評価が跡を絶たない。NHKのTVドラマでも新島襄・八重夫妻、村岡花子、広岡浅子を紹介して視聴者を引きつけ続けた。広岡が還暦過ぎてから熊本バンドの宮川経輝から受洗したことは省かれたが、阪田寛夫は小説で何冊も宮川像を紹介した。「明治人」と題して無名のキリスト者を紹介した本も数冊あった。小説ではなく伝記で留岡幸助を書いた高瀬善夫、山室軍平を書いた吉屋信子が日刊紙への連載で好評を博したことも忘れられない。明治人の迫力が読者を魅了し続けたのである。

なぜ明治人は現代人を引きつけるのか。歴史的に社会変動期は新宗教を出現させ、感化力を備えた人物を生む傾向があった。プロテスタンティズムは新しい国に倫理と立志の精神をもたらした。本書では新帰朝の新島を軸にした書生あがりの十人の交流が紹介されて、内村鑑三、植村正久、小崎弘道、田村直臣、本多庸一、新渡戸稲造、井深梶之助、大島正健、押川方義、原胤昭が表紙を飾る。互いの対立と交流を介して明治人の気骨が伝わってくる。四バンドの面々を交流させつつ明治史を織る卓抜な着想は、従来試みられなかっただけに読者の関心を引く。埋もれがちな人物への照射も試み、築地バンドを加え、著者と関係深い熊本バンドの頁数の二倍を超える頁を費やしているのもいい。原胤昭、田村直臣も登場する。山田風太郎の開化小説で描かれて知られた両人は教界外の人にも人気があるだけ貴重な記述である。また政界転出の押川の活動も取り上げて紹介する。人物交流の輪は国内だけでなく海外にも及び、アメリカ滞在中の新島、内村、新渡戸の交流なども初めて知る人が多いであろう。豊かな交流の記述は本書の特ダネだ。

明治は書生という新しい人物像を生み出した。「青年」も小崎の発案である。明治は教界でも青春の時代であった。その中核に四バンドの面々より約七歳上の新島を据えて、交流の輪が広がる。本書は同志社大学の豊かな資料を駆使し、新資料を紹介しつつ、従来知られざる人物交流の諸相を読者に提供してくれる。明治キリスト教は教派を確立させたが、本書は教派よりも人物交流の過程を伝える。桑原武夫が啄木と金田一を論じ、「明治の友情史」と表現した。旧来の家族の支えを失った書生は、明治時代に、友情を生み出した。教界でも、兄弟喧嘩のような論争も友情史の一齣と読めるところに持ち味がある。「六合雑誌」創刊の頃、方針をめぐって植村と小崎が取組み合いの喧嘩をしたことを田村が書き、それを著者は本書に引用している。従来の日本教会史に出てこない逸事の紹介も本書の特徴と言えるだろう。

豊かな資料の探求が明治史への興味を引き出す。「日本の花嫁」事件で日本人牧師と宣教師の判断が分かれ、会衆派と長老派の一致が新島の動向によって挫折することが後年の教会史の流域を広げることになる。しかし友人関係は教派の枠に狭められなかった。晩年の内村と田村の友情は教派の外にあって展開していく。一種の信徒の交わりである。

十年間務めた同志社社長を辞任して帰京した小崎を植村と内村が歓迎したことも、教派を超えた教界の明治友情史の一齣と言える。明治期の政治的圧力が教会に加わるとき、友情が団結してプロテストする動きも、友情を強める契機になった。一高を追われた内村の妻に洗礼葬儀を行い、内村の就職斡旋をするのも横井時雄・金森通倫の友情であった。明治は友情が歴史を形成した時代だ。内村鑑三の京都逼塞中に執筆させて文名を高めさせ、上京の機会を作ったのも徳富蘇峰であったことを考えても友情史への関心が絶えない。

人物を主軸にする記述は歴史理解を助ける。明治以来、山路愛山、比屋根安定が面接によって明治の群像を描いて教会史への関心を高めさせたが、本書は前二者にない独自な手法によって明治プロテスタントを紹介してくれた。教界外の人々にも読まれることが望ましい。

（おおた・あいと＝日本エッセイスト・クラブ常任理事）

（A5判・三九八頁・本体三八〇〇円＋税・教文館）

大崎節郎著作集

第四巻　カール・バルト研究２（全７巻）

大崎節郎
Setsuro Osaki

バルトの教義学的思惟の現実性

神の恵みのみ業の具体性，
人間の応答を論じる．
バルトの教義学的思惟が
精確に述べられていて，
バルト神学への
誘いともなっている．

菊判・上製・函入・内容案内進呈
定価［本体6,000＋税］円
ISBN978-4-86325-085-7

株式会社　一麦出版社
札幌市南区北ノ沢３丁目4-10
TEL（011）578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯　mobile.ichibaku.co.jp

最初期キリスト教史を学ぶ上での必読書

荒井　献著

使徒行伝　下巻

今井誠二

本書は一九七七年に上巻、二〇一五年に中巻が出版された現代新約注解全書『使徒行伝』の完結編であり、二〇一〇年四月から二〇一三年三月まで月刊誌『福音と世界』に掲載された連載記事「新約釈義　使徒行伝」の後半部分に修正・加筆がなされたものである。本書は「パウロの第三回伝道旅行」から「エルサレムにおけるパウロの逮捕とローマへの護送」までの注解である。全三巻を通して注解の合間に重要な諸テーマについての解説が付論としてなされているが、下巻では独立した補論として「最後のパウロ」について詳説がなされている。

上巻・中巻に引き続き、著者は読み手の思い入れを原テキストに読み込むことを注意深く避け、書き手が訴えかけているメッセージを慎重に原テキストから引き出そうとすることに専念している。一三八五頁にも及ぶ注解書上中下巻を通した使徒行伝全体の概説は、下巻である本書の最後に記されている。これは「出来るだけ内容をアップツーデートにするため」のものである（本書まえがき）。既に上下巻を手にしている読者も、『福音と世界』の既読者も、まず下巻末にある最新の概説に目を通すことをお勧めする。そうすれば、既に記されてきた上中巻、そして本書が、一方で森であるルカ文書全体を見ながら、木やその枝葉となっている一つ一つの章節や言葉の意味を読み取ろうとしており、他方で一つ一つの言葉や章節を見ながら、文書全体の意図を見直すことが、繰り返し行われていることがお分かりになるだろう。著者が概説で ἀπόστολος（使徒）という言葉のルカの語法と表題（直訳すれば「使徒たち所業録」）がついている写本の登場年代から判断して「当書の内容を表題にはとらわれずに考察の対象としていかねばならない」と最初に断わりを入れていることにも、原テキストに忠実であろうとする謙虚な解釈学的姿勢が表れている。本書は、使徒行伝（使徒言行録）の校訂されたギリシャ語底本を、その時点での最新の研究成果に基づき、どう解釈して日本語に訳すかを、歴史的・批判的に解説する学術的注解書である。

一区切りの物語の大枠の要約が最初にあり、さらに小さな区割りの日本語翻訳と注解が施された上で、付論として最初期キリスト教の歴史的展開にとって重要な諸テーマの解説がなされる。最初に付論を次々に拾い読みして使徒行伝（使徒言行録）の全体の流れを把握してから、細かい章節の意味を確かめる読み方もあるだろう。しかしできれば、ゆっくりと翻訳・注解を一節一節辿りながら、何故そのような付論へと導かれるのかを順に追っていくことをお勧めする。章節の注解部分で、読み手の立場・見方によって意味や訳の大きな違いが出てくる箇所や、パウロ自身の手紙の記述とルカの記述が一致していないような場面、あるいは複数の学説が対立しているようなテーマについて、著者は自分の所見を提示する前に、込み入った問題を交通整理してくれているからである。読み手は、勿論この交通整理を踏まえた上で、著者とは違う判断に導かれることもあるだろう。本書は、研究史や問題の交通整理が丁寧になされているために、たとえ著者と立場や意見が違う読み手であっても、読み手自身の判断を原テキストから引き出し、更なる論争を促すことを導くという意味で、頗る教育的な注解書であると言うことができるだろう。本書は、ルカ文書、最初期キリスト教史をテーマに取り上げる大学の演習では、必ず目を通さねばならない文献である。聖書学のゼミのみならず、学生主体の聖書研究会や教会の集会、個人の聖書研究でも重宝するだろう。

些細なことで恐縮だが、一〇頁の ἄρχεσθαι は ἄρχω、一二頁の δεισιδαίμονες は δεισιδαίμων、二四頁の διαλεγόμενοι は διαλέγομαι、五一頁の ὥρμησαν は ὥρμησαν、七七頁の καταφέρομαι は καταφέρομαι、八一頁の οὐ は οὐ、一六六頁の ἔρμιαν は ἐρημίαν、一九五頁の εἶπα, εἶπον は εἶπα, εἶπον、二九一頁の ἐντεγχάω は ἐντυγχάνω、三二三頁の πᾶσαν は πᾶσαν、三二六頁の παθητός は παθητός、三三三頁の πορεύομαι は πορεύομαι、三五四頁の φύγω は φεύγω、三五九頁の προαλαμβάνω は προσλαμβάνω、三六五頁の ἐπὶ は ἐπί、三九六頁の εἴπον は εἶπον の誤りである。

（いまい・せいじ＝尚絅学院大学准教授）

（A5判・四五五頁・本体九〇〇〇円＋税・新教出版社）

ガラテヤの信徒への手紙を読もう　自由と愛の手紙

船本弘毅

ガラテヤの教会に対し使徒パウロが福音に立ち帰るよう、愛をもって熱く語った書簡。ルターの熱愛したこの書を、現代を生きる私たちはどう読むのか。

四六判 並製・162頁・1620円

聖書に基づく祈りを知り、深めるための格好の手引き書

聖書の中の祈り

大島 力

アブラハム、モーセ、イエスなど、旧・新約聖書に登場する人物が捧げた12の祈りを選び、やさしく説き明かす祈りの入門書。

四六判 並製・128頁・1404円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 FAX03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp《価格8%税込》
http://bp-uccj.jp

当時の原資料に密着した価値ある研究！
土岐健治・村岡崇光著

イエスは何語を話したか？

新約時代の言語状況と聖書翻訳についての考察

原口尚彰

本書は一九七九年に教文館より刊行された土岐氏の著書『イエス時代の言語状況』を若干加筆修正したものに、村岡崇光氏の論考「イエスと聖書翻訳　タルグム」と土岐氏自身の筆になる付論2「〈エッセイ〉新約聖書本文批評学などについて」を付け加えて一冊の論文集としたものである。土岐氏は中間時代のユダヤ教の研究者であり、ヨセフスの『ユダヤ戦記』の翻訳やユダヤ教に関する著作（『初期ユダヤ教と聖書』、『初期ユダヤ教の実像』、『初期ユダヤ教研究』）によって知られている。土岐氏はまた、『新約聖書ギリシア語初歩』や『楽しいラテン語』等の古典語の教科書の著者でもあり、古典語で書かれた資料に即してイエス時代の言語状況を解明するのに必要な語学的素養については非常に恵まれた立場にあると言えよう。

イエス時代のパレスチナの言語状況についての研究は、M・ブラック、J・A・フィッツマイヤー、J・N・セヴェンスターといった欧米の研究者によって既になされているが、日本人の研究者による日本語のまとまった著作としては本書が唯一であり、再版を出す価値は十分にある。土岐氏は先行研究を踏まえて、聖書内外の原資料を丁寧に再検討し、的確な判断を下している。このように原資料に徹底的に密着することは聖書学者に求められる大切な研究姿勢であり、日本の聖書学の世界でもしっかりと定着することを評者は望みたい。

著者は第一部第一章でヘレニズム時代以降、パレスチナにおいてもギリシア語が広汎に用いられるようになった状況を、文献資料や碑文資料やパピルス資料を読み解くことを通して明らかにする。第二章ではヘブル語が一世紀のパレスチナにおいても書き言葉として生き続けるのみならず、話し言葉としても限られた範囲ではあるが残存していたとする。第三章では、碑文資料やバル・コクバ書簡等の文献資料や、新約聖書に現れるアラム語表現等の証拠から、当時のユダヤ人民衆の間でアラム語が日常語として最も広汎に用いられていた言語であると結論する。とすれば、「イエスは何語を話したか?」という本書の表題となっている問いへの答えは、「アラム語である」ということになるであろう。

第二部はアラム語による聖書翻訳であるタルグムについての、村岡崇光氏による論考である。同論考は死海写本や死海周辺の洞穴から発見された古文書の解析によって、一世紀のパレスチナには既にタルグムが流布していた可能性が強いことを指摘しているが、イエスや弟子たちが日常的にタルグムを読んでいたかどうかについては、証拠の不足を理由に断定を避けている。

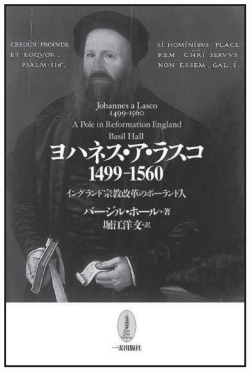
付論1は、シュ・レゲイス（あなたはそう言う）、あるいは、シュ・エイパス（あなたはそう言った）という自らのメシア性に関するイエスの証言が（マコ一五・二、マタ二六・二五他）肯定の意味なのか、否定の意味なのかということについての考察である。著者の土岐氏は、語学的・釈義的理由から、この句が肯定ではなく、回答の回避を意味することを立証している。

付論2は、岩波訳の訳文や本文注についての批判的検討であり、新約聖書について本文批評の点から他の本文の採用の可能性を論じると共に（マコ一・四一、ヘブ二・九）、本文の異読についての注の不十分さと（ヨハ一・一八b、七・五三―八・一一、Iヨハ五・七―八）、訳文の不明確さ（マタ一〇・二九他）を指摘している。それぞれの指摘は傾聴に値するが、既成の翻訳の批評よりも、本文批評上の詳細な議論によって新たな本文の読み方の可能性を提示することに集中した方が生産的ではないだろうか。この点については著者の今後の研究の展開に待ちたい。

（はらぐち・たかあき＝フェリス女学院大学教授）

（四六判・二三〇頁・本体二二〇〇円＋税・教文館）

ヨハネス・ア・ラスコ
1499—1560
イングランド宗教改革のポーランド人
バージル・ホール
堀江洋文＊訳・解題



初の評伝！

カルヴァンの理想を
実現させた宗教改革者.
日本の長老制をとる教会の
源流がここにある！

四六判変型・上製
定価［本体2,200＋税］円
ISBN978-4-86325-095-6

株式会社　一麦出版社
札幌市南区北ノ沢３丁目4-10
TEL（011）578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯　mobile.ichibaku.co.jp

キリスト教人間学入門

歴史・課題・将来

その歴史から仏教との対話まで

金子晴勇著

芦名定道

本書の著者である金子晴勇氏は、アウグスティヌスやルターの研究において日本を代表する研究者であり、すでに多くの優れた学術書を出版してきている。本書は著者の長年の研究の到達点を示すものであり（「これまで長い歳月をかけて探求してきた研究課題の最終報告書」）、しかも、「入門」とあるように、その研究成果を専門家だけでなく一般の読者に向けて解説することを意図している。本書を通して優れたキリスト教思想研究の成果に触れることができることを、読者と共に喜びたい。

これまで著者は、哲学とキリスト教思想史（ヨーロッパ）という二つの領域で研究を行ってきたが、「キリスト教人間学」というテーマは、これら二つの研究領域、つまりキリスト教思想史と哲学的な人間学とを総合するものとして位置づけられる。本書では、まず「キリスト教人間学」を構成する二つの研究領域をそれぞれ概観した上で、「キリスト教人間学」の内容へと考察が進められる。その点で「Ⅰ　人間学との関係」と「Ⅱ　聖書の人間観」は、本書の中心であるⅢとⅣへの導入と位置づけられるが、それぞれ、マックス・シェーラーによって組織的に確立された哲学的な人間学と、人格神に対する信仰において形成された聖書的な人間観とについて、要を得た説明となっている。それに対して、「Ⅲ　キリスト教人間学の歴史」と「Ⅳ　キリスト教人間学の課題」は、「キリスト教人間学」をその歴史的展開（アウグスティヌスから現代のキリスト教思想まで）と体系的諸問題（一〇の主題）の両面から叙述したものであり、キリスト教人間学の中心部分にほかならない。そして本書は、将来の研究に残されたキリスト教人間学の課題（「Ⅴ　キリスト教人間学の将来」）を明示することによって締めくくられるのである。

以下においては、本書の豊かな内容から、特に注目すべき二つのポイントについて紹介したい。まず紹介したいのは、キリスト教人間学における人間学的三分法である。著者自身、「むすび」において、「キリスト教の三分法」が「この著作の全体を通して研究の核心となって」おり、それが「エラスムスとルターの人間学から学んだもの」であることを強調している通りである。

哲学的伝統において、人間はしばしば「魂と身体」といった二分法において理解されてきたが、著者は、聖書的人間理解（パウロ）について、「魂と身体というギリシア思想に特有な二元論に何ら関心を示さず、ものを具体的に考えるユダヤ的思考にしたがって人間の全体のことを考える」（五八頁）と論じている。その上で、たとえばルターにおいて、人間を「霊・魂・身体」で捉える三分法が思想的に明確な仕方で表現されていると指摘する。「霊なる最内奥において人は神と出会い、神の導きの下に理性は自己を統御し、外なる身体を介して世界に連なっている。人間とは神と世界とのあいだに立つ存在なのである」（九一頁）。こうした人間理解はヨーロッパのキリスト教的伝統を形成し、個人の倫理性から社会制度に至るまで大きな影響を及ぼしているのである。

しかしこのキリスト教人間学の射程は、ヨーロッパ思想圏にとどまるものではない。著者はこの人間学が日本の文脈においていかなる意味を有するかについて大胆に議論を進める。詳細に触れることはできないが、著者はキリスト教人間学の三分法を内村鑑三において確認し（一三五―一四二頁）、さらに人間学という視点からキリスト教と仏教の対話の意義について言及する（二三四―二五五頁）。ここに著者は、キリスト教思想の普遍性と特殊性をめぐってなおも取り組むべき将来的課題を見出しているのである。

著者の開拓したキリスト教人間学の研究は、キリスト教の将来的課題に取り組む上での確かな道しるべであって、著者に続く研究者によるさらなる展開に期待したい。

（あしな・さだみち＝京都大学大学院文学研究科教授）

（四六判・二七四頁・本体二〇〇〇円＋税・教文館）

クリスティン・ジャック編
永井みぎわ訳

世界がぶつかる音がする
サーバンツの物語

すいせんの言葉：フィリップ・ヤンシー氏
この本は、まさにその貧しい人たちに出会わせてくれる。彼らの名前を知り、彼らの生き方に触れることができる。彼らの揺さぶるような証言に耳を傾ける中で、私も自分の世界とのぶつかりを感じた。

＊好評発売中！　●四六判・三〇四頁・一、三〇〇円＋税

100年に向かって歩み続ける

キリスト教雑誌　2016 第4号

共助

A5判・定価500円（税込）

《夏期信仰修養会 8/3-8/5》案内号
案内、プログラム、申込はHP参照
http://www.kyojokai.com/

説　教　勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。飯島　信
随　想　東日本大震災と私　西川良三
随　想　平和を実現するために　木下安子
巻頭言　六十九回目の憲法記念日と緊急事態条項　小菅敏夫
聖書研究　Ⅰテサロニケ⑤　七條真明
報　告　初めて佐久学舎に参加して学んだこと　千葉　雄
【証】小笠原　順、中西　博、佐伯邦男

バックナンバーもございます。
お問合せは、基督教共助会またはヨベル迄

株式会社ヨベル　YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp
〒113-0033　東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851　FAX03(3818)4858
＊自費出版の専門出版社＊資料・呈

教育者・福祉実践者の石井筆子を多方面から描く
津曲裕次著

鳩が飛び立つ日「石井筆子」読本

男女共同参画と特別支援教育・福祉の母

杉山博昭

石井筆子は、知的障害者施設の先駆である滝乃川学園を創設した石井亮一の妻として、知られている。研究文献が見られるようにはなったが、わかりやすく筆子の生涯を知ることができるのは、映画「筆子・その愛　天使のピアノ」か、井出孫六『いばら路を知りてささげし　石井筆子の二つの人生』であろう。いずれも、すぐれた作品ではあるが、映画や小説の性格上、実証的ではなく、詳細な事実を細かく追っているわけではない。

津曲裕次によって『鳩が飛び立つ日　石井筆子読本』が発刊された。津曲は、滝乃川学園をはじめ障害者教育・福祉史の第一人者として長く活躍し、数多くの研究を重ねてきた。無名であった筆子についての研究水準を、飛躍的に高めたのは津曲である。本書の発刊の動機は、筆子が中学校教科書の教材として取り上げられることである。筆子への関心の高まりが予想される反面、教員や生徒が学習を深めようと思っても、正確な内容をもった一般向けの文献が乏しかった。それを補うため本書を役立ててほしいと記されている。

本書は3部構成であり、第1部は「筆子の生涯」である。長崎の大村で出生し、上京後は教育者として活躍する。最初の結婚をして三人の女児が生まれるが、いずれも障害があるか、短命であった。やがて亮一と再婚し、亮一と共に滝乃川学園の運営に携わる。さまざまな学園運営の苦闘の後、亮一の死後に園長となって滝乃川学園を担ってゆく。

筆子は、「亮一の妻」として、亮一あっての存在と誤解されやすい。実は、女子教育者として活躍し、男女平等を求める思想家でもあった。一人の自立意識や独創性をもった人間として、社会を開拓する動きをしていたことが、明らかにされている。

第2部は、「〝石井筆子〟研究の流れ」で、筆子についての先行研究を紹介している。筆子は死後に、ほとんど存在が忘れられてしまい、ようやく一九七〇年代から、未解明な面が残りつつ研究が深められていく歩みが述べられている。そして、主要な研究が、網羅的に紹介され、これから筆子を研究しようと思う者にとって、有益な手引きとなっている。

第3部「石井筆子の著作と資料」には、筆子自身の著作が、網羅的に紹介され、しかもいくつかの作品については、筆子直筆の原稿が写真版でそのまま掲載されている。読者は労せずして、一次史料によって、筆子の思想や人物像を知ることができる。巻末には、「略年譜」が付され、筆子の概略を知ることができる。

一五〇ページという決して厚くはない分量のなかに、豊富な情報が整理されている。津曲による長年の研究の成果が、惜しげもなく披露されているのである。多数の写真が掲載されて、視覚的に把握することができるなど、贅沢な内容に満ちている。

福祉の先駆者の生涯を描く本にありがちなのは、顕彰に流れて生身の人間像から離れ、美談に終始する空虚な記述になってしまうことがある。しかし、美談的な記述は徹底的に排され、あくまで史実によってのみ、筆子から学ぼうとしている。どこまでも実証的であり、細かい事実関係についても正確さを求めている。滝乃川学園が、常に財政的に厳しい状況にあり、いつも財源確保に苦慮していたことを、生々しく述べている。筆子についてだけでなく、滝乃川学園や障害者教育・福祉をめぐるさまざまな歴史的状況を、的確に知ることができる。

ただ、多くの事実を書き込んでいるため、何が重要なのか、なぜそういうことになったのか、流れがわかりにくい。たとえば、長女とともに洗礼を受けたことが唐突に、しかも簡潔に書かれている。社会階層の高い女性がキリスト者の道を踏み出すには、相当な熟慮や葛藤があったはずであるが、洗礼に至った動機としては、「バイブル塾」でキリスト教信仰を学んだ経験が、違う箇所で書かれているだけである。そこでの学びが洗礼につながったのかが、本書の記述では不明である。

しかしそれは、本書を出発点にして、読者がみずから筆子に向き合い、理解を深めるために、宿題を出したものと受け止めるべきかもしれない。本書を通して、石井筆子という女性キリスト者の真実を、多くの方に知っていただきたい。

（すぎやま・ひろあき＝ノートルダム清心女子大学教授）

（B5判・一五〇頁・本体二六〇〇円＋税・大空社）

神学会編・「神学」77号
2015年12月26日発行

「神学」は半世紀以上も読み
継がれた神学専門誌です！

主題：「福音と福音主義」
――棚村重行教授献呈論文集――

福音と日本人の共同幻想
……芳賀　力
教会の公同性をめぐって
……神代真砂実
「福音と福音主義」再考（一）
……棚村重行
日本メソヂスト教会「宗教箇条」
第16条の成立をめぐって…落合建仁
J.C.ヘボン著『修心論』にみる
福音伝道への取り組み　…小室尚子
「福音主義的公同教会」の
　建設のために……林　牧人
福音は日本と中国のはざ間の
波濤を越えられるか？…松谷曄介
（その他自由研究1本掲載）
A5判・201頁・定価2,400円＋税

「伝道と神学」6号
2016年3月25日発行

「伝道と神学」は東神大と教会を結ぶ
伝道実践と神学の雑誌です！

日本伝道協議会全国大会記録（2015.6）
主題：現代の日本で、なぜ福音を信じ伝えるのか
特別講演：アジアの文脈における日本伝道
……洛　雲海
「福音と福音主義」再考（二）…棚村重行
聖書学と聖書の伝統的解釈…田中　光
聖書正典（カノン）と「信仰の規範（カノン）」：
その相互作用について……中野　実
テサロニケの信徒への手紙一、二における
主の再臨についての教え…焼山満里子
ヴォルフハルト・パネンベルクにおける福音と教会…須田　拓
Picture Perfect Paradise Pursuit: Our Family and God`s Family …Wayne A. Jansen
（その他博士課程後期学生論文2本掲載）
A5判・237頁・定価1,500円＋税

お買い求めは
全国キリスト教書店または
本学へ直接お申し込みください
〒181-0015 東京都三鷹市大沢3-10-30
東京神学大学 総務課
Tel 0422-32-4185 Fax 0422-33-0667
E-mail soumu02@tuts.ac.jp

孤独な私は、これでケーススタディ
上林順一郎監修、みふみマンガ

教会では聞けない「21世紀」信仰問答Ⅲ
迷えるココロ編

古賀　博

「もし困ったことがあれば、何でも訊きに来たらよい、急ぎの場合は電話でも。メールでも一向に構わない」、顔を合わせる度に、近くに赴任してきた若手牧師にこう語りかけてきたという中堅牧師。「しかし結局は、最後まで彼から一度たりとも電話もメールなく、ましてや訪問を受けることもなかった。もちろん、教会がうまくいっているのなら何も言うことはない。しかし、いつの間にか問題が深刻化し、どうしようなくなり、もう手の施しようがなくなってから、『助けてください』って泣きつかれても……」。地方教会で奉仕していた頃、教区の牧師たちが集まる研修会にて耳にした嘆きだ。その若手牧師は、結局ごく短期間でその教会を去っていくこととなったとのこと。

似たような状況は、日本全国どこにでも生起している。決して若手だけが大変なのではない。誤解を恐れずに言えば、現代日本の教会、広い世代の牧師たちに共通している課題だろう。

暗中模索、五里霧中、右往左往しながら、とかく孤独さの内に問題に取り組み続けている牧師たち。実は助け手や相談相手は身近にも発見できるはずなのに、それに気づかずに、もっと残念なことによき関係を作れずに……そして、いつしか独りよがりへと至り、自分勝手な事象理解と方法で対処し続けていく。結果として、問題をうまく解決できず、いたずらに教会や信徒を傷つけ、そして自分も自信を失い、場合によっては心や身体に深い傷を負う、こんなことが幾つも起こっている。どうしたらよいのだろう!?

本書は、『キリスト新聞』の人気コーナーであった「教会質問箱」に寄せられた全国の牧師よりの質問に、担当や専門家が丁寧に答えてきた回答をまとめた一冊。題して、『教会では聞けない「21世紀」信仰問答Ⅲ――迷えるココロ編』。このシリーズもついに三冊目となった。

装丁にはみふみさんのマンガが配され、また「シリーズ刊行の言葉」（まえがき）に記された監修者の言葉もウイットに飛んでいる。各章もまずはマンガに始まるなど、一見とても「軽く」見せている。

しかし、踏まえられているのは、右記のような日本の教会の現状。まえがきに登場する言葉を借りるならば、まさに「コミュニケーション・クライシス」が、信徒と牧師、牧師どうしの間に生じているのだ。こうした事態をただ深刻に受けとめてというのではなく、できるだけ軽妙に、前向きにという監修・編集サイドの牧会的配慮の故「軽さ」演出なのだろう。

一読して、改めて経験の大切さ、それに根ざした知恵、また専門家の意見・見解と多様なネットワーク、そしてこれらの分かち合い、自分の問題へと引き寄せるケーススタディ、その一つひとつを疎かにしてはならないことを思わされる。しかし、こうした学びの場や関係を作り出していくことは、現状では何とも難しい、だからこその「教会質問箱」であり、この一冊なのだ。

今回は「迷えるココロ編」ということで、第一章「ココロの癒しを求めて」（心の悩みやパーソナリティーに問題を抱えた方への対応）、第二章「愛ゆえに人は苦しむ」（恋愛や結婚を巡って）、第三章「結婚も出産もゴールじゃない」（結婚生活や子育てに関すること）、と三章立てとなっており、計五三のQ&Aで構成されている。

私はまず第一章の「キレやすい信徒にどう対応?」から読み始め、第二章の「牧師に手を握られるのは嫌」に進み、第三章の「夫婦喧嘩をやめさせるには?」で一息ついた。牧会上の心配や悩みに極めて実践的なアドバイスが満載で、孤独な私はこれでせっせとケーススタディし、現場に活かしたいと思っている。

ぜひ、シリーズで揃えて、じっくりと読み、学んでほしい。

（こが・ひろし＝日本基督教団早稲田教会牧師）

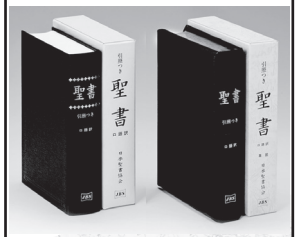
（四六判・一三〇頁・本体一六〇〇円＋税・キリスト新聞社）

日本聖書協会
God's Word — Life for the World

7色刷カラー聖書地図入り
大型引照つき口語訳聖書

再版のご希望が多かった、『大型 引照つき口語訳聖書』。技術的に不可能とされていた7色刷カラー聖書地図を復刻した冊数限定発行です。

2015年に発行60周年を迎えた口語訳聖書は、「毎日出版文化賞」を受賞するなど話題を集め、キリスト教会、ミッションスクールに広く普及しました。文語訳譲りの歯切れのよい文体で、現在も日本中で愛用されています。



引照つき口語訳聖書
左 クロス装 JC053
定価（本体6,500円＋税）
右 折革装/三方金 JC059S
定価（本体15,000円＋税）

※それぞれ、ケース入り、A5判。
共に巻末に、カラー地図12ページ（ほかに地図索引12ページ）入り。

お問合せ ☎03(3567)1987（頒布部）
http://www.bible.or.jp/

真摯に自己と向き合うことから始める
賀来周一著

キリスト教カウンセリング講座ブックレット7
自分を知る・他人を知る
交流分析を土台に

関谷直人

私たちはしばしば「自分のことは誰よりも自分が一番知っているのだ」と思う。そればかりか、そう口に出して言うことさえある。しかしこれは必ずしも真実ではない。否、往々にして私たちは自分のことを知らないのである。自分では知っていると思っていたとしても、それがどの程度その「実像」に近いかというと、おそらく大抵は心許ないものなのだ。だから、この不確かな「自分」を通してしか出会うことができない他者というものも、存外不正確で見当外れなものなのかもしれないのである。

牧師という立場にいる人間もこのことから自由ではいられない。もしかしたら、「先生、先生」と呼ばれている分、謙虚に自分自身を見つめるという作業を怠っている可能性だってある。そうなると「牧会」が怪しくなってくる。自分自身のことをちゃんと理解できていないままで信徒と向き合い、その精神の深奥に触れるということは不可能であるからだ。ここはひとつ真摯に自己と向き合うことから始めたい。「自分を知る」ことから始めたいのである。

キリスト教カウンセリング講座ブックレット7として刊行された「自分を知る・他人を知る」ことをテーマとする本書は、まさにこうした牧師を始めとして、あらゆるジャンルの「援助者」、さらにはキリスト教の信徒・求道者のニーズに応えるものである。ただし、本書は書店の「スピリチュアルコーナー」や、「自己啓発書コーナー」に平積みされている類のものの多くとは趣を異にしている。

幅広い読者を想定している本シリーズのポリシーに従って、本著者もまた読み易さという点に大いに配慮しているが、少なくとも第一部の「交流分析理論を通して知る自分と他人」については、基本的に一九五〇年代にエリック・バーンが提唱した交流分析という心理療法の入門書的な構成になっているので、ここを読み進めるにはそれなりの「覚悟」が必要だ。

各章のタイトルは「パーソナリティの成り立ち」や「認める・認められる」などのとっつきやすいもので始まっているが、それらの後には「自我状態」「やりとり分析」、「ストローク」、「時間の構造化」、「人生の構え」、「心理ゲーム」、「ディスカウント」、「人生脚本」などの言葉が続けられており、交流分析に一度でも触れたことがあるものなら誰でも、ここで交流分析で用いられる主だった概念・スキルについて網羅的に論じられていることがわかるだろう。本書の第一部はその点で手堅くまとめられた「交流分析入門」的側面を持っており、第一部を通して「自分を知り、他人を知る」ためには、まずは腰を据えて――場合によってはここから他の交流分析についての文献に手を伸ばすぐらいの「学びの姿勢」で――これらの概念・スキルと真正面から取り組みたい。

第一部ではその「交流分析の入門書」的な性格からか、それぞれの概念やスキルを教会や信仰といった「キリスト教的」コンテキストの中で論ずることはある程度抑制されているように見えるのであるが、その点で、G・W・オルポートの議論を主たる下敷きにしてパーソナリティと信仰について論じた第二部は、長年にわたってキリスト教会と心理学の世界をつなぐことに尽力してきた著者の知見と情熱が直接的に伝わって来る印象だ。それだけに、ここは牧師や信徒、求道者など「キリスト教関係者」にとっては大いに読み応えがあるところであろう。

まずもって自分を知り、そして他者を知るということの大切さと、そのためのスキルを学ぶことは、一人の人間としての成熟や信仰者としての成熟に欠かすことができない。教職者も教会の信徒の方々も本書を通してそのことを学ぶことができるはずである。

（せきや・なおと＝同志社大学神学部教授）

（A5判・一七二頁・本体一五〇〇円+税・キリスト新聞社）

教文館の本
http://shop-kyobunkwan.com/

牧師・神学生必携!

ギリシア語 新約聖書釈義事典
H・バルツ／G・シュナイダー編 荒井献／H・J・マルクス監修
新約聖書本文に現れる全ギリシア語語彙の文脈的・歴史的・神学的意味を解き明かす比類ない事典。教職者・神学生必携のロングセラーを小型化・軽量化。
●A5判・函入・三巻セット・本体63,000円
第Ⅰ巻544頁／第Ⅱ巻644頁／第Ⅲ巻600頁

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
TEL 03-3561-5549
呈／図書目録 ●価格は税抜

説教はジャズか？
平野克己監修
加藤常昭、深田未来生、雨宮慧、渡辺信夫他著

聖書を伝える極意
説教はこうして語られる

森下　滋

昨今パフォーマンスとしての説教という事を語る時に、説教はジャズ、或いはジャズ的であるという発言をちらほらと見聞きするようになってきたことにお気づきであろうか。私が学ぶ神学校でもこの春、説教学の教師の講演の中で、同様な事が瞬間ではあるが取り上げられており、私自身もそうだ、とは思いながらも、まだ説教とジャズの繋がりはハッキリ見えなかった。

一般的なジャズに対してのイメージとは、難しい、どこが聴くべきポイントなのか掴めない、はじまりと終わりがよくわからない、うるさい、退廃的である、などのネガティヴなイメージも多いと感じる。

確かにこれでは、礼拝の中心たる説教とジャズとは結びつきそうもない。では、なぜ今、説教とジャズなのか。本書は私にそれを考えさせた。

ジャズという音楽は確かに自由で即興性の高い音楽ではある。しかしその演奏の大前提は、楽曲の理論的分析の上でのみ、あるモティーフをすでに修得している自分のフレーズ、即ち語り口を伴い展開させることが可能になるのである。次々と繰り出されるフレーズの連続は、即興的に聴こえるが、もっとミクロで捉えると、演奏しながらも同時に瞬間的に自分の近未来に弾きたいフレーズを選択するという、瞬間的な作編曲であると言える。

つまり一番重要な事は、釈義、語るべきテクストが何を語っているかを聴き取る事なのである。和音やメロディを分析して、未だ聴こえていない音を聴くことなのである。

この観点から私は、この本に頻出しているキーワードを因子と見立ててある分析を行ってみた。因子とは例えば、釈義、黙想、説教、自由、ジャズ、教会、実行者、「ふら」（召命、滲み出る人間性）、出来事、落語、場、アート、解釈、理論他などである。

「ふら」とは少し説明を加えるなら、演者から滲み出る何とも言えない人間味の事であり、それは芸気質や無骨さ、或いは人情であったりする。「ふら」は、演者だけではなく、落語の登場人物にも適応され、例えば長屋の八つぁんを、いかに聴き手が共感出来るように立体的に語れるかという事にも重要な要素である。

こうして対立する概念、即ち説教者が抱える現実問題として浮上したことは、テクストと自由、あるいは「ふら」。アートと教会または説教、自由と説教または教会、「ふら」と理論、釈義、テクスト、といった結果である。

説教において、聖書テクスト自身が持つ自由を語り出せていない状況。自由にできない説教。自由でない教会の現実。テクストと説教者の実存的人生との関係性。召命と釈義。これらは説教者が日々向かいながらも悩みの種となる相反する現実ではないであろうか。

この本は、そのような現実を突破する起爆剤になり得る一冊である。本書に登場する説教者たちは、見事にバラバラである。しかし、それぞれが神の言葉を語るという事への召命により押し出されて、日々説教の務めに向かい合っている。この一点は見事な通奏低音である。そして、それぞれらしい手法で、教会の叫び、主イエスの叫び、未だキリストを知らぬ人々の叫びを聴き取り、説教へと結実させていく。

彼らは彼らが考える以上に、三位一体の神の自由を聴きとって、自由に語っている。

何と説教者と聴衆とに与えられた喜びであろうか。

本書でも行われている、説教壇で語りながら、だが同時に未だ聴こえてこないテクストの叫びを聴き取り織り込みながら語るという事を、ジャズ的な説教として定義しても良いかと考える。

個人的に、実践家の釈義のやり方や息抜きの仕方などが公開されており、修行中の我が身として、大いに目が開かれた。

（もりした・しげる＝ジャズピアニスト、東京神学大学大学院博士課程前期）

（四六判・二〇〇頁・本体一八〇〇円＋税・キリスト新聞社）

キリスト新聞社の本
Kirisuto Shimbun,Co.,Ltd.
▶神学の基礎知識を網羅

好評発売中！
神学の小径Ⅲ
——創造への問い
創造信仰と自然科学を読む！
芳賀力◉著
■A5判・440頁・4,500円

▼チャペル・アワーで語られた現代を生きるための奨励集！

すてたもんじゃない
——同志社大学チャペル・アワー・メッセージ
越川弘英◉著
今、キリストの福音を伝える！　現代人に向けて語られたメッセージの数々。
■四六判・216頁・1700円

キリスト新聞社
〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1
TEL. 03-5579-2432
FAX. 03-5579-2433（価格は税別）
E-Mail. support@kirishin.com
URL. http://www.kirishin.com

闇の勢力に抗して

見えつ隠れつする「闇の勢力」への抵抗

内坂　晃著

関田寛雄

本書における三〇に及ぶ諸論文の成立の「場」は三つある。その一は「教会と国家学会」である。二〇〇一年に創設されたこの学会は必ずしも大きい組織とは言えないがその発信内容は二一世紀（一九及び二〇世紀を踏えての）の諸問題に普遍的に対応する貴重な発言であり、著者はその事務局長を担当している。第二は無教会関係の諸集会における講演及び論文であり、無教会の諸先輩との豊かな対話と共に一定の批判も述べられている。第三は現在牧師である聖天伝道所及び諸教会における説教並びに講話である。

本書に一貫する著者の思想とその姿勢は、この時代に見えつ隠れつする「闇の勢力」への抵抗である。即ち近代日本の形成において天皇制の下、富国強兵の歴史を動かして来た、また大戦後も新たに動かしている国家主義の暴威の指摘とそれに対する民衆として、更にキリスト者としての抵抗であり、「真実と事実」を何よりも尊ぶ批判的精神の発露である。それはまことに説得的であり、同時代に問いを持って生きる者に対する勇気と希望を与える助言でもある。

著者のこのような抵抗の根拠は聖書に立つ信仰である。特に第三部においては明確に時代の文脈に即して力強くそれが述べられている。聖書の信仰のダイナミズムを大切にする故に、しばしば教会が陥る教義主義や「偶像化」がきびしく批判される。「三位一体」にしても「神の子キリスト」の教義にしても、それらが歴史的ルーツを離れて固定化され正統主義の標語とされる所に教会のみならずキリスト教信仰そのものの枯渇を見るのである。それは更に救いの理解にも及び、特にロマ書三章二二節の「イエス・キリストの信仰によって」をめぐる解釈は注目すべき論義である。律法主義による救いは福音によって否定されたが、「イエス・キリストを信ずる（私の）信仰によって救われる」とする信仰主義もまた福音によって裁かれなければならない。救いはイエス・キリストの（信仰）真実の故に万民に及ぶという、贖罪の主の主格的仲介性が正に福音なのである。この点は、著者が数回にわたって言及している重要な点である（「私の信仰」「早天礼拝奨励」など）。

このような聖書に基づく預言者的信仰及び贖罪信仰を根拠とする発言は、この世界にうごめく「闇の勢力」を直撃するのである。本書において著しい特色は「闇の勢力」の実態についての実に詳細にして豊富な情報の提供と、それについての著者の鋭利な批判的分析である。これが本書の第一部、第二部を占めているのであるが、ここにおいて著者の熱い危機意識とそれを裏づける歴史的認識は、評者の認識不足を指摘されるばかりの貴重な証言であることを強調しておきたい。その動機となっているものは日本人としての加害責任の自覚である。カール・バルトが「聖書を新聞の如く、新聞を聖書の如くに読む」と言ったとか聞いたことがあるが、著者の福音理解は正にそこから生れて来ているように思われる。例えば「偽りの霊との戦い――自民党憲法草案の問題」は聖天伝道所の修養会での発題であり、「敗戦と天皇制」は大阪教区のある委員会での発題である。今、日韓・日中の間で問題になっている「竹島」「尖閣諸島」の事にしても詳細な資料の下にまことにクリアな結論を導き出す、著者の調査の努力とそれを促す聖書的歴史意識には学ぶ所の多いものがある（二三七頁の各教科書における問題の扱いのリストなど）。国益中心主義の、政府による教育への干渉が露骨に見られる現在、キリスト教主義学校の責任と使命が再確認させられるのである。

一キリスト者としての著者の信仰理解についてこのように述べている。「信仰を個人の内面の事柄に限定してとらえ、社会や政治のこととは切り離して考える二元論的福音理解との戦い」が必然であり、「神の御前においては、個人であれ、国家であれ、罪は罪なのであって、悔い改めを求められることに変わりはありません」。著者が日本基督教団の「戦責告白」を大切にする所以である。

（せきた・ひろお＝日本基督教団神奈川教区巡回牧師）

（B6判・四一四頁・本体三〇〇〇円＋税・教文館）

神学ダイジェスト120号

急速な変化を遂げる現代社会。その中にあって、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2016年6月発行
A5判128頁
定価630円（税込）

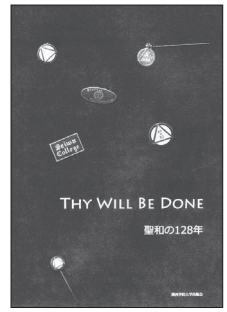
特集　三位一体論
生活の中で追体験されている父と子と聖霊　鳥巣義文
三位一体に関する考察　K・ラーナー
社会的三位一体神学と交わりの教会論　B・M・ドイル
三位一体の似姿としての人間　A・デーケン
ただ一つの霊と神の多様性について　M・アマラドス
今日の秘跡　A・T・ケイルガ
聖書の中の暴力　O・フックス
（第五回）『正教神学概論』―キリスト論―　V・ロスキー
家庭に関するシノドス　C・ラム

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044　Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail　shing-dt@netjoy.ne.jp

三つの源流から「聖和」の歴史を辿る力作

聖和史刊行委員会編

Thy Will Be Done 聖和の128年



戒能信生

「学校史」というジャンルがある。いずれも大冊で、各大学やミッションスクールの周年行事の際に記念出版として刊行される。多くの場合市販されず、それもあってかあまり面白い読み物ではない。その学校関係者だけを読者対象としており、内輪誉め的な内容に終始し、贈呈されても結果として本棚の肥やしになってしまうことが多かった。ところが、最近の「学校史」の中には、編集に工夫が凝らされ、戦時下の苦闘を具体的に第一次資料に基づいて掘り下げるなど、内容豊かな力作が多い。日本キリスト教史の観点から見ても、注目すべき学校史が見られるようになった。本書がそれである。「聖和」として知られて来た聖和大学は、二〇一三年に廃止され、関西学院大学と合併して関西学院聖和短期大学として存続しているが、それ以前の一二八年に及ぶ複雑な歴史を整理・編集したものである。

「聖和」には三つの源流があるという。一つは一八八〇年にアメリカン・ボードの婦人宣教師たちによって創立された神戸女子神学校で、組合教会の女性伝道者を輩出したユニークな伝道者養成校であった。二つ目は一八八六年にメソヂスト系の婦人宣教師たちによって設立された広島英和女学校（現在の広島女学院）保姆養成科として発足した広島女学校保姆師範科の流れである。そして三つ目は、一八八八年に南メソヂスト教会宣教師メアリー・I・ランバスを初代校長として始まったランバス記念伝道女学校である。このうち、後者の二つが一九二一年に合同してランバス女学院となり、さらに戦時下一九四一年に、神戸女子神学校と合同して聖和女子学院が設立される。この複雑極まりない歴史を、それぞれ詳細な年表とその時々の興味深いエピソードを紹介する二六編のコラム（力作！）、そして豊富な写真や図版を配して、読みやすく分かりやすくまとめられている。結果として聖和は、数多くの婦人伝道者、保育者、そしてクリスチャン・ワーカーを産み出して来たことが跡付けられている。ことに組合系とメソヂスト系の教派を越えた合流は、聖和の歴史にエキュメニカルな色合いを添えている。初期の困難多い時期を担った婦人宣教師たちの祈りと働きがそこにあった。私が感銘を受けたのは、創立者の一人M・I・ランバスが、隠退後中国から遺言として寄せた手紙の最後の言葉である。

「わたしたちは自分自身が神のご用に役立つものとなれるようにつとめ、また周りの人々もそうなれるように手伝いたいと願い続けています。誰ひとりとして、不必要な人はいません。また、誰かのほうが他の人よりも優れていることもありません。わたしたちは、神に創られた者として互いに助け合い、わたしたちの周りにいるもっとも低く、弱くされた人たちにこそ、優しい尊敬をむけることによって、神の栄光を称えましょう」。

もう一つは、戦時下の聖和の「寄宿舎日誌」「クラス日誌」の類が相当数残されており、生徒たちが書き残した率直な感想や心情を読み取ることができることである。この類の資料が保存されていることは少なく、その点でも注目させられた。

故・竹中正夫先生の労作『ゆくてはるかに――神戸女子神学校物語』（二〇〇〇年、教文館）でも紹介されていたが、この国のキリスト教史を、多くの場合裏方で担った幾多の女性たちが、この学校に学んでいる。あの牧師の夫人は神戸女子神学校の出身だったのか、あの伝道者の母親はランバス女学校で学んだのか、あの教会付属幼稚園を長く担った女性は聖和で育てられたのかと、初めて知らされることが多かった。日本キリスト教史に表立って登場するのは、依然として男性たちが圧倒的に多い。その母たち、妻たち、そして姉妹たちが注目されることは少ない。それを補うためにも、本書が広く読まれることを願っている。

蛇足であるが、評者の母親は一九三〇年代にランバス女学院で学んでおり、私の二人の姉は戦後の聖和の出身である。恐らくそれもあって、私のような者に書評が廻ってきたようだ。

（かいのう・のぶお＝日本基督教団千代田教会牧師）

（B5判・三二一頁・本体三二〇〇円+税・関西学院大学出版会）

関西学院大学出版会

Thy Will Be Done

聖和の128年

聖和史刊行委員会編

異なるルーツをもつ3つの学校がそれぞれに合同を重ねた1880年から2008年までの教育の歴史をここにまとめる。日本における1880年代以降のキリスト教学校での教育、幼児教育・保育、そしてアメリカ人宣教師たちの献身的な働きを伝える。

B5　本体価格3200円〈税抜〉

〒662-0891　兵庫県西宮市上ケ原一番町1-155
TEL0798-53-7002　FAX0798-53-9592
http://www.kgup.jp/

本屋さんが選んだ お勧めの本

『幸せはあなたの心が決める』

渡辺和子著

松山キリスト教書店　平岡光司

1,000円+税
ＰＨＰ

この本は、著者が幼い時から現在まで経験した思いや、ご自身が病気になったり、色々な人と出会ったりした人生経験を語った本です。高齢化社会と言われて久しいですが、医療の発展に伴い平均寿命が長くなり、少子化が進むにつれて、社会の中での高齢者の割合が増えています。色々なストレスを抱える人も少なくないでしょう。

変えられない条件を無理に変えようとして苦しむことなく、変えられないものを受け容れる心の静けさと、変えられる可能性のあるものは変えていく勇気を出すよう勧められています。これからの人生、困難や挫折などに出合うこともあるでしょう。そんな時、希望と幸せを見出せる1冊です。

『浅子と旅する。』

フォレストブック編集部編

1,200円+税
いのちのことば社

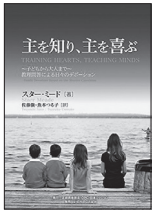
朝の連続ドラマとして放映された「あさが来た」のヒロイン、広岡浅子の生涯を描いた物語です。何度も苦難に遭い、その都度、不屈の精神で起き上がってきました。「九転十起生」と自らの人生を語っています。晩年洗礼を受け、神さまから愛されて生涯を閉じられました。この本をから不屈の精神と元気を貰いましょう！

松山キリスト教書店
〒790-0804　松山市中一万町1-23
TEL：089-921-5519
FAX：089-921-5413
E-mail：sksch@dokidoki.ne.jp
URL：http://www.geocities.jp/matsuyama_1007/index.htmi

『主を知り、主を喜ぶ』

スター・ミード著

名古屋聖文舎　石原尚久



2,300円＋税
いのちのことば社

「改革派教会」の伝統の中で信仰生活を送る方にとって、キリスト教教理を学び続けることは欠かせません。数ある改革派諸信条のうちでも「ウェストミンスター小教理問答」（以下「ウ小教理」）は、初歩的なものとはいえ、教理を体系的に学ぶ上で今日でも広く用いられていると思います。その学びのための「講解」や「解説」本も、数々出版されてきました。

中でも有名なのが、G・I・ウィリアムソン師の手になるもので、二〇一二年になって日本語訳が出版され（「よくわかる教理と信仰生活」PCJ出版、発売・いのちのことば社）、広くお勧めできると思ったものの、現在は品切れに。残念に思っていたところへ新たに出版されたのが、この『主を知り、主を喜ぶ』でした。

この本のユニークなところは、副題の「子どもから大人まで　教理問答による日々のデボーション」とあるように、「ウ小教理」の全部で一〇七問ある問答の一つ一つを、月曜日から土曜日までの六日間をかけて、毎日聖書を読みながらじっくり考えられるように書かれているところです。しかも、子どもたちにも理解できるようにやさしい言葉で書かれており、家庭の中で大人と子どもが共に聖書を読みながら話し合う場面が想定されています。「ウ小教理」は、子どもたちの信仰教育のための教理という本来の目的に照らしてみても、この本を通して得られる恵みは大きいはずです。

家庭の中で、子どもたちにどのように信仰の中身を伝えていくのか。教理の学びはどうしても理論的になりがちで、子どもたちには難しく感じてしまうこともあるでしょう。しかし本書を用いることで、聖書が示す教理について親子がいっしょに話し合い、考えるきっかけを作ってもらえたらと思います。

名古屋聖文舎
〒464-0850名古屋市千種区今池5-28-4
TEL：052-741-2416
FAX：052-733-2648
E-mail：nagoya-seibunsha@nifty.com
URL：http://homepage3.nifty.com/seibunsha/

既刊案内（2016年4月～5月）（定価はすべて本体価格＋税）

著訳・編者	書名	判型	頁	本体価格	版元	発行日
H.キュンク著 矢内義顕訳	キリスト教は女性をどう見てきたか —原始教会から現代まで	四六	196	2,100	教文館	4／5
土岐健治 村岡崇光	イエスは何語を話したか? —新約時代の言語状況と聖書翻訳についての考察	四六	220	2,200	〃	4／30
金子晴勇	キリスト教人間学入門 —歴史・課題・将来	四六	274	2,000	〃	4／30
加藤常昭	説教への道 —牧師と信徒のための説教学	四六	178	1,600	日本キリスト教団出版局	4／15
竹内緑	ルワンダ 闇から光へ —命を支える小さな働き	四六	104	1,200	〃	4／20
ジョナサン・エドワーズ著 柴田ひさ子訳 森本あんり監修	自由意志論 —ジョナサン・エドワーズ選集1	A5	424	7,000	新教出版社	4／1
K.P.ドンフリード、 I.ハワード・マーシャル著 山内一郎、辻学訳	パウロ小書簡の神学 —叢書新約聖書神学9	四六	271	4,000	〃	4／25
上林順一郎監修	教会では聞けない「21世紀」信仰問答Ⅲ —迷えるココロ編	四六	130	1,600	キリスト新聞社	4／22
賀来周一	キリスト教カウンセリング講座ブックレット7 自分を知る・他人を知る —交流分析を土台に	A5	172	1,500	〃	4／22
日本キリスト改革派教会 憲法委員会第一分科会	日本キリスト改革派教会宣言集	A5	193	2,400	一麦出版社	4／1
齋藤孝志	信仰とは何か? —ヘブライ人への手紙に徹して聞く	新書	320	1,000	ヨベル	4／20
喜田川信	約束の言葉への信仰 —ローマ書講解説教	四六	124	1,200	教文館	5／30
樋野興夫編著	TOMOセレクト がん哲学外来で処方箋を —カフェと出会った24人	四六	160	1,500	日本キリスト教団出版局	5／15
加藤常昭、 徳善義和他執筆	説教黙想アレテイア ヘブライ人への手紙	B5	206	3,300	〃	5／20
川端純四郎	教会と戦争	四六	435	2,500	新教出版社	5／1
岡野昌雄	信じることをためらっている人へ —キリスト教「超」入門	B6	160	1,200	〃	5／31
今井敬隆	あなたはヨブと出会ったか —迷い、躓き、行き詰まりながら読む	四六	388	1,600	〃	5／31

書店名	郵便番号	住　所	電　話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西６丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6　東北教区センター・エマオ1F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新宿2-8-2　千葉クリスチャンセンタービル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kirisutokyoushotenhanna@ybb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7b.biglobe.ne.jp/~yokohama-cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612		info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsha/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		ktjordan@mbox.kyoto-inet.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶろすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-331-9933			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/^tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/matsuyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net./	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	903-0207	中頭郡西原町字翁長777　沖縄キリスト教学院内	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は　日キ販営業部　TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2016年8月号

特集　憲法9条は有効だ
＝非武装市民防衛の思想

寄稿者＝宮田光雄、三石善吉、大島美穂、河見誠、比企敦子、ユルゲン・モルトマン

好評連載　聖書とわたし（星野博美）、聖書素読（金必順）、レヴィナスの時間論（内田樹）、新約釈義（辻学）、南島キリスト教史入門（一色哲）、現代日本の福音（高橋裕子）、詩篇の思想と信仰（月本昭男）、ことばの履歴書（佐藤優）ほか

A5判・本体588円・〒70円
定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社　TEL：03-3260-6148
Email: sales@shinkyo-pb.com

編集室から

編集者を脅かす宿敵が日々忍び寄っている――その名はアムネジア（健忘）。馬齢を重ねるにつれ記憶力の減衰に煩悶する折も増えた。脳は萎縮し神経細胞は消滅するという厳然たる事実を抗わず受容し、大過なく勤め上げることを冀うばかり。

忘却とは忘れ去ることなり。知識の忘却と別に、往時の世界・空気感の忘却もある――PCや携帯電話のない時代の想起は困難であろう。また、思い込みや勘違い、願望も手伝い、過去が忘れられ、個人的・集団的に記憶が創造されることも往々にしてある。日本人は昔から時間に正確……ではない。明治以前には遅刻の概念がなく、幕末の外国人技術者は日本人の悠長さを嘆いた。演歌は自由民権運動の演説歌の後継……ではなく、一九六〇年代に洋楽由来の歌謡曲から派生。戦時中英語は敵性語として法的に排除……は誤り。民間の自主規制で英語教育も存続した。近代以前は土葬が主流……も不正確。仏教の火葬（荼毘）が主流で、明治新政府の火葬禁止令は短命に終わった。

伝統の正体は？　恵方巻は、某コンビニが一九八九年に縁起物として販売、九八年から全国に普及。大阪の花街での余興が嚆矢とも。初詣は、明治以降に鉄道会社の集客策から生まれた慣習。神前結婚式は、皇太子の婚儀を参考に一九〇一年に神宮奉斎会が創始。道徳教材にも採用された「江戸しぐさ」に至っては史的根拠の皆無な幻想で、これは過去の捏造と言える。

多神教は寛容……日本史を軽く繙くだけでも、国内人口の三％超を占めたキリシタンは根絶され、明治期の浦上四番崩れは六六二名の死者を出した。神仏分離令は廃仏毀釈を生じ、国家神道と相容れない新宗教大本は一九二一年と三五年に弾圧され、一六名が拷問で死亡。一九三六年ひとのみち教団が解散。一九四二年に始まるホーリネス弾圧では一三〇名以上が逮捕された。反面、一神教の歴史も寛容とは程遠いのであるが。

「忘れっぽい人は幸いである」（ニーチェ『善悪の彼岸』）とは耳に痛い。右にも左にも与せず、自賛からも自虐からも距離を置き、トリビアリズムを極めて韜晦したいが駄目だろうか。

追記　三月号「編集室から」の誤字は膾炙→膾炙。（髙橋）

本のひろば　2016年9月号　予告

本・批評と紹介：岡野昌雄著『信じることをためらっている人へ』、ジェレミー・ダフ著『エレメンツ増補改訂版　新約聖書ギリシャ語教本』、H・キュンク著『キリスト教は女性をどう見てきたか』、ノエル・ストレトフィールド著『ふたりのエアリエル』ほか

新教出版社 〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1 Tel: 03-3260-6148 / Fax: 03-3260-6198
HP：http://www.shinkyo-pb.com、メール：sales2@shinkyo-pb.com

権利論

レフト・リバタリアニズム宣言

ヒレル・スタイナー著／浅野幸治訳

7月29日

ベーシックインカムを認めるリバタリアン？

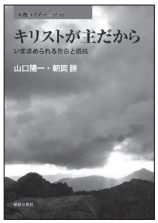
個人の所有権と財の配分のあり方を精緻な理論構成によって徹底的に考え抜き、自由と平等のダイナミックな均衡を提示する。ロールズ『正義論』以来の議論に一石を投じたレフト・リバタリアニズム（左派完全自由主義）の基本文献、待望の邦訳。著者11月来日予定。

◆A5判・本体5000円

キリストが主だから

いま求められる告白と抵抗

山口陽一・朝岡勝 著



歴史に対する信仰者の責任

【新教コイノーニア32】

教会の社会的責任を考え続けてきた2人の論者が、戦後政治の大きな文脈の中で現在の安倍政権の施策を鋭く分析。第二次大戦下の教会の過ちと少数の先達の戦いに学びつつ、今やキリスト者の「抵抗権」と「信仰告白」に関わる事態だと訴える。

◆A5判・本体700円

教会と戦争

川端純四郎著

3年前に惜しまれつつ逝去した著者の、残された論文・講演録などから、今必読の28編を精選。

宗教学者、実践家、教育者、そして教会に仕え続けた篤実な信徒だった著書の、多面的で広範な活動の根底にあった思想と信仰。戦争責任から奏楽者の務めまで。

◆四六判・本体2500円

使徒行伝 下巻 【現代新約注解全書】

荒井 献 ついに上・中・下巻、完結 ◆A5判・本体9000円

下巻は18章23節から最後まで。なお巻末には補論として「最後のパウロ——使徒行伝28章30—31節に寄せて」および緒論的な「概説 使徒行伝」を収める。

既刊 使徒行伝 上巻 ◆本体6000円 中巻 ◆本体9000円

人が神にならないために 説教集

荒井 献 著者初の説教集。入手し難かったコイノニア社版を復刊。◆B6判・本体2000円

本のひろば　第七〇三号　二〇〇六年八月号
一九五七年七月一七日　第三種郵便物認可
二〇〇六年八月一日発行（毎月一回一日発行）
発行所　〒162-0814　東京都新宿区新小川町九―一　一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三―三二六〇―六五二〇　振替〇〇一七〇―五―一一六七九
発行人　本村利春　編集人　土肥研一　印刷所　(株)平河工業社
発売所　日本キリスト教書販売株式会社　電話〇三―三二六〇―五六七〇
定価七八円（税抜七二円）（〒62円）
一年分一三〇〇円（送料共）

日本キリスト教団出版局　〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp　ホームページ http://bp-uccj.jp《価格8%税込》

『氷点』『塩狩峠』『銃口』など――心に響く珠玉のことばが、いまよみがえる

三浦綾子 366のことば

森下辰衛 監修　**松下光雄** 監修協力

今なお多くの人々を魅了し続けている三浦綾子作品。三浦文学研究の第一人者 森下辰衛監修のもと、1年を通して触れられるよう、三浦綾子の著作から366の珠玉のことばを厳選して収録。美しい草花のイラストも随所にちりばめられ、愛蔵書・プレゼントに最適。

◆四六判 並製・160頁・1,620円

信仰と希望と愛、その中で最も大いなる愛（アガペー）を告げる

アガペーの言葉

山崎英穂

時代の闇の中でどう歩けばいいのか惑うとき、神の愛は疲れ果てた心に語りかける。アガペー(愛)が、実際に触れることのできる温かさをもって感じられる80のメッセージ集。**◆A5判 並製・192頁・2,160円**

山崎英穂のメッセージ集〈好評発売中〉		
	『エルピスの言葉』	A5判・190頁 2,160円
	『ピスティスの言葉』	A5判・192頁 2,160円